琉球大学学術リポジトリ

沖縄・うるま市、浜比嘉島のシヌグ植物のナガバカニクサ小論

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): シヌグ, 祭問植物, カーブイ(冠), ナガバカニクサ, 掌状型 キーワード (En): Shinugu, religious ceremony plant, crown, Lygodium japonicum(Thunb.) Sw.var.microstachyum(Desv.)Tard.& C.Chr., palmate type 作成者: 新里, 孝和, 芝, 正己, Shinzato, Takakazu, Shiba, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36752

沖縄・うるま市、浜比嘉島のシヌグ植物のナガバカニクサ小論

新里孝和[1※]、芝　正己[2]
[1]国頭村文化財保存調査委員/沖縄県文化財保護審議会専門委員、[2]琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

Lygodium japonicum(Thunb.) Sw. var. *microstachyum*(Desv.) Tard. & C.Chr., use in Shinugu which are religious ceremonies in Hamahiga island, Uruma-City, Okinawa

Takakazu SHINZATO, [1※]and Masami SHIBA[2]
Kunigami Village Cultural Properties Preservation Survey Member/Expert Commission Member of Cultural Properties of Okimawa Prefecture
Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

キーワード：シヌグ、祭祀植物、カーブイ（冠）、ナガバカニクサ、掌状型、
Keyword: Shinugu ,religious ceremony plant, crown, *Lygodium japonicum*(Thunb.) Sw. var. *microstachyum*(Desv.) Tard. & C.Chr., palmate type,
※Coresponding auther(E-mail:shinri@trad.ocn.ne.jp)

浜比嘉島のシヌグ祭祀

うるま市は 2005 年４月、具志川市、石川市、勝連町、与那城町の４市町が合併した市で、洋上に５つの有人島がある。沖縄島中部に位置するうるま市の東側、太平洋側に伸びた半島を与勝半島と称し、その細長い半島の北側半分が旧与那城町で海上に平安座島、宮城島、伊計島があり、南半分の旧勝連町には浜比嘉島と津堅島が属している。またほぼ半島に接するように無人島の藪地島がある。

与勝半島と平安座島を結ぶ現在の海中道路（長さ約 5km）は、石油産業のガルフ社の進出で 1971 年に着工[1)]、その後２車線が完了しさらに４車線に拡幅された。さらに平安座島と宮城島、宮城島と伊計島が架橋で結ばれ、また平安座島と浜比嘉島が 1997 年浜比嘉大橋（長さ 1,430m）で連結された[2)]。津堅島は離島で、勝連の平敷屋漁港から約 5ｋｍの海上を定期便が就航している。

本小論の対象地となる浜比嘉島は、南北にやや長い三角形状の小島で、面積約 1.95 ㎢、周囲長約 6.7km、地勢はほぼ平らで最高所がスガイ山 78.7m、自然環境は地質・土壌が琉球石灰岩、泥灰岩土壌（クチャ・ジャーガル）、沖積土壌からなる[3)]。森林植生は亜熱帯照葉樹林で、熱帯性と暖帯性の植物が混生し、石灰岩や海砂およびアルカリ性土壌を基盤とする樹木群から成り、低地－丘陵にはクワノハエノキ、ガジュマル、アコウ、ハマイヌビワ、ヤブニッケイ、タブノキ、オキナワシャリンバイ、アカギ、クスノハカエデ、クロツグなど、海岸にはハスノハギリ、オオハマボウ、モンパノキ、クサトベラ、アダン、などが茂る。なお島の東海上には無人の浮原島、南浮原島がある。

1960 年頃は、人口 1,384 人（浜区 574 人、比嘉区 810 人）、半農半漁で、漁業はナイロン網漁でいろんな魚（和名は「沖縄大百科事典」1983 年、沖縄タイムス社、を参考にした）、テール（カゴ）漁法でタマン（ハマフエフキ）、クチナジ（イソフエフキ）など、一本釣りでミーバイ（ハタ科、アーラミーバイ：マハタ、ユダヤミーバイ：マダラハタなどがある）、ヤキー（ヤキータマン：フエフキダイ科のアマミフエフキ？）など、クリ舟遠業で主にカジキをとった。他に白イカ（シルイチャー：アオリイカ）、矢でタコもとった。農業は水田がなく、畑地で芋、麦、大根、ふだん草、大豆、トー豆など、また軍向けにスイカ、トマト、ピーマン、人参、キャベツなどが盛んに栽培された[4)]。2011 年、人口は両部落で 533 人[5)]、

50年前より約850人減少している。生業は海ではモズク漁が盛んで、畑地ではサトウキビ、ニンニク、トマト、ダイコンなど、各種蔬菜を栽培するが、往時の語りには今なお海の交易に馳せていた島民が思い描かれる。

伝説は、沖縄の始祖とされるアマミキョ・シロミキョが久高島から津堅島を経て、水の豊かな浜比嘉島に移住したとして、アマミチュ―の墓があり、シルミチューが祀られ、一般には琉球開闢の島と称されている。今では大分簡素化されているものの、旧歴による年中行事のシルウガン、ハチウクシー、12カ所廻り、ミッチャンサク、ウマチ―、シマクサラー、シヌグ、お盆・エイサー、柴さし、ムーチ―などが行われる[6]。

浜比嘉島は全体が琉球石灰岩の丘陵地で、沖積土の西側に浜区と東側に比嘉区の２字からなり、比嘉区は間に耕作地を挟んで比嘉部落と兼久部落がある。高良[7]によると、浜比嘉島は17世紀中期の長期にわたる琉球の間切・村の状況において、勝連間切に「はま村」は登場するが比嘉村の名はなく、18世紀初期の『琉球国由来記』等の史料に浜村に加え比嘉村が登場しているから、17世紀後期のある時点で比嘉村を含む2村体制となりその後に及んだ、と論述されている。18世紀以後、勝連間切浜村は船乗りが目立ち、浜村人は民間船の船頭もしくは水主（クルー）として大いに航海し、沖縄島の西・東の２つのルートのうち東ルートの与那原・泡瀬の港を利用して都市と山原地域を結んで物流・流通を盛んに行っていたようである。

うるま市の島々はほぼそれぞれにシヌグ祭祀がある。以前は[6]、浜比嘉島のシヌグは神人が浜区のシヌグ堂の洞窟で鎮めの拝みをし、洞窟に石を投げ入れた。現在は村単位ではなく、浜区ではノロ神と根神の２人でシヌグバルで行われ、神酒の代わりに粥を用いている。拝みは次第に簡素化され、比嘉区は北側の海岸のハマガーでやるようになっている。今回の聞き取りでも浜区と比嘉区のシヌグ祭事は年２回で旧暦６月28日と８月28日の同日に、両区とも別々に行われている。さらにこれまでの浜比嘉島のシヌグ祭祀に関する論文や報告書には植物によるカーブイの記録が見当たらないが、今回、かつて女神人たちは山原・国頭地域と同じように、シダ植物ツル性のナガバカニクサで鉢巻（カーブイ）を作って行事を行っていたことが分かった。しかしながら現在はそのカーブイ行事もなく、それを知る人も希となり、また男性が一日中浜辺に建てられた小屋にこもることもなくなっている。浜比嘉島のシヌグの目的は、村落の悪払いと祖霊仏神の鎮めのためとされているが[8]、カーブイに用いられたナガバカニクサを通して、本種の祭具としての意義や浜比嘉島のシヌグの内実および琉球・山原地域との関連を考えてみることにした。

浜比嘉島のシヌグ祭祀に関する調査は、2年ほど前から少しずつ情報を集めていたが、とくに2016年9月（旧暦8月）を前後して機会をみつけ集中して行った。今回の調査は聞き取りが主で、協力者は浜区・比嘉区の自治会館（自治会長・書記会計）、浜区；柴引利哲（昭和14年生、男神人）、柴引正道（昭和12年生）、西浜チヨ（大正11年生）、安谷屋カズミ（昭和9年生）、浜門　勇（昭和2年生）、前仲門哲男（昭和9年生）―比嘉区；松村義雄（昭和6年生、男神人）、儀保ツル子（大正15年生）、玉城　弘（昭和13年生、現在は兼久に住む）、玉那覇成勇（昭和22年生、兼久出身で在住）、その他高齢者集会のミニデイや島の緊急避難訓練時の参加者であった。

ナガバカニクサの生態と民俗

カニクサ（*Lygodium japonicum*(Thunb.) Sw.ツルシノブ、シャミセンヅル）はシダ植物、フサシダ科（カニクサ科）のカニクサ属で、葉は長く伸びてツル状になり他に巻きつく、多年生草本、通常夏緑性で葉は冬になると枯れるが、九州南部の無霜地帯では冬でも枯れず常緑となる。羽片は多数、小羽片は薄い洋紙質で３出状に掌状または羽状に２-３回分裂し、頂裂片は長く伸び小さな鋸歯がある。富山県、福島県と関東地方以西の暖帯、琉球列島、朝鮮・中国・ヒマラヤ域からアジアの熱帯、オセアニアに広く分布する[9、10、11]。

琉球列島以南のカニクサは小羽片の頂裂片が線状披針形で他よりとくに細長くなり、ナガバカニクサ（中国；狭葉海金沙）(*Lygodium japonicum*(Thunb.) Sw. var. *microstachyum* (Desv.) Tard. & C.Chr.タイワンカニクサ・テリバカニクサ）と称され、図１のように葉はツル性で2m以上に伸び常緑性である[9、10、12]。本変種は山地や原野などに産し、林縁や琉球石灰岩の岩上の明るい場所、里山や村里でごくふつうにみられる。

カニクサは蟹草で、子供がこの蔓でカニを釣ったことによる[9、11]。長沢[13]によると、別名のツルシノブは、葉がシノブに似ていて蔓草であるからで、方言には、カブリカズラ（瀬

戸内)、カラスブカズラ（沖縄)、カンツル（京都)、ゲンシャ（静岡)、サミセンカズラ（中国地方)、シャミセン（長崎)、シャミセンカズラ（岡山・山口・鹿児島)、シャミセングサ（愛知・和歌山)、シャミセンズル（岡山・熊本)、ビンビンカズラ（岡山)、ピンピンカズラ（和歌山・岡山・山口・宮崎)、ピンピングサ（岡山・和歌山)、ペンペン（静岡)、ペンペンカズラ（岡山)、ペンペングサ（千葉・福岡・長崎)、があり、いずれもこの草の芯を引っ張って三味線のように弾いて遊ぶところからという。その他ツズラカズラ（和歌山)、ツルシノブ（和歌山・広島)、ホタルグサ（山梨）がある。

図１　道端の林縁に生えるナガバカニクサ
葉は他物に巻き付いて長く伸びる

カニクサは葉の中軸などを用いてかごなどを作ることがあり、葉は祭の時の飾りに用いられることもありと記され、また利尿剤などとして民間薬に用いられる[9]。台湾では漢名；海金沙で民間薬となるが他の利用はみられない[14]。琉球地域のナガバカニクサ（テリバカニクサ）の方言名は、天野[15]と大野[16]によると、奄美群島：ガラスブカズラ（本島・加計呂麻・請島・与路島を含む)、ツルマキ（住用)、ツルマキカズラ（名瀬)、カブリカズラ（瀬戸内)、ガラシブカズラ（竜郷)、ガラスィグカズィラ・マッタブグサ（笠利、天野ではマツタブグサ)、マタワラビ（大和、天野ではタマワラビ)、ユズルハンダ（喜界)、シダカジラ・ウンジャンカズラ・ミミジグサ（与論）で、沖縄島群島：チヌマキカンダ（沖縄)、チンマチカンジャ（与那)、センマチ（諸志)、チヌマキ（田港・真喜屋・知念)、チヌマチカンダ（久志)、チルマチ（具志堅)、ウミカーブイ（漢那)、チルマチャー（久手堅)、ヒージャークルバサー（東江)、チンダグゥーグサ（渡嘉敷)、カブイグサ（久米）で、宮古群島：インバン（狩俣)、チュースーイギィ（伊良部)、テウソズィウサ（伊良部)、フスバフサ（池間)、ヤマビキハリ（多良間）で、八重山群島：ズーマキカザ（石垣)、カニングサ（白保)、アミヌヌシカッツァ（西表)、シツカザ（西表)、シッカッツァ（西表)、シツマシカッツァ（西表)、ズタキカッツァ（西表)、ジマサシ（波照間)、ンバヌファ（与那国)、ウンバヌファ（与那国）がある。また他に、玉置[17]にはチヌマカンダ（沖縄；久志)、ヤマビキハ（多良間)、シチカッツァ（西表；租納)、シツカザ（石垣、西表)、シッカンザ（小浜)、ズマキカザ（西表)、ツルマキ（西表；大原、パナリ)、ンバ（与那国）が、下地[18]にはカミヌクーヴサ（宮古；カニクサ）がある。

ナガバカニクサは琉球列島において、ノロの祭事や呪いの祭具に使われ、またこの植物の髄をとり水の中に入れておくと蛇になるという言い伝え（迷信）があったらしい[16]。与論島ではウンジャンは海神を祭る神事で、ウンジャンカジラ（シダカズラ：ウンジャンハジラともいう）は昔ウンジャンのときに、女神人が頭に巻いていたといい[19]、蛇になる話やウンジャンカジラ、カブリカズラなどは、本小論では大事な言葉のように思える。方言の意味は、カブイグサは神事の場合に神女が被る草、アミヌヌシカッツァは雨の主カズラで、雨乞の時に「雨の主」（神女）をカニクサで被いつくすことに由来し、シッカッツァは節祭カズラ、シツマシカッツァは包み込むカズラ、チュースーイギィ・テウソズィウサは天蚕糸草である[15]。与那国では蚕の蔟に用いたという[17]。

方言名はツルを意味するカズラ、カジラ、カンザ、カッツァ、ハンダ、チンダグゥーなどがほとんどで、巻く・鉢巻・被るを意味すると思われるツルマキ、チヌマキ、チンマチ、チルマチ、カブリなどがあり、またカブリ・カブイ・カニン・ユズル・ウンジャン・ウミカーブイ・アミヌヌシ・シツなどは神事やその時のカーブイ（冠）に関係しているのではないかと思われる。琉球諸島ではナガバカニクサは里地にふつうに産し、浜比嘉島では、琉球石灰岩地の沿岸や丘陵の林縁、岩上などによくみられる。葉はツル性で、中軸の性質や色、多数の羽片をつけ、小羽片が裂葉・掌状となる形がシヌグ祭祀など年間行事の祭具に用いられる大きな特徴ではないか、と考えられる。

祭具ナガバカニクサの意義

浜比嘉島の里地の身近なツル植物として、ハマアズキ、グンバイヒルガオ、ヘクソカズラ、リュウキュウウマノスズクサ、ノアサガオ、フウトウカズラ、タイワンクズ、サクララン、トウツルモドキ、ソメモノカズラ、テリハノブドウ、エビヅル、シイノキカズラ、ハカマカズラ、コバノハスノハカズラ、オキナワソケイ、トゲナシカカラ、リュウキュウテイカカズラ、ナガバカニクサ、リュウキュウボタンヅルなどが生育する。それらの中からナガバカニクサが神事のカーブイの祭具となったのは、何らかの特異性が具わっているからに違いない。

比嘉区の大方の区民は年間行事の一つサンガチャー（旧暦３月３日、節祭り）には、方言でハマカンダーと呼ばれるグンバイヒルガオの蔓束で子供たちが綱引きを行い、冠にして被り遊んだ記憶をもっているが、神人たちがそれを神事のカーブイにしたかは定かでない。ナガバカニクサの方言名は浜比嘉島では一般名でホーヤーグサ（這う意味）、タグヤーグサ（手繰って採取する意味）といい、またカーブイグサ、カブヤーグサ、カーブヤーとも呼ばれる。琉球大学民俗研究クラブ[4]の報告にも「ノロは白いハチマキ（サージという）の上からカーブイというタブヤ草（またはカーブイ草）でつくったカブイ（冠）を被り、白いカカンとたまご色の衣装を着る」とあり、ナガバカニクサは広く琉球地域の方言名も合わせて神祭を司る神人が鉢巻・冠として年間行事に用いられたのは確かなことである。多くの比嘉区民はシヌグ祭祀に植物を使うのは見たことがなかったと語り合うが、年中行事にはアシビナーでナガバカニクサのガンシナー（鉢巻、カーブイ）をやっていたという話も聞かれる。

ナガバカニクサのカーブイは、松村義雄氏はシヌグ以外の神事にも被ったといい、柴引利哲氏は火神（トゥヌ）を拝む行事にはすべて被ったといい、カミグサであると話す安谷屋カズミ氏も同じような語らいである。玉城弘氏は、子供の頃神人であった母方の祖父松村カナ氏と神行事に参加した記憶をたどりながら語るには、比嘉区では昭和25－30年頃まで女神人がナガバカニクサのカーブイを被り、年に３-４回（旧歴）、シマクサラー（2月15日）、サンガチャー（3月3日）、アブシバレー（4月15日）、グンガチウマチー（5月15日）の神事を行ったという。また神事はグスクにも上り、シヌグはほぼアマミチュ―の墓の対岸にある大岩と小岩の間で拝み、それから神人たちと一緒に引潮の時にはヒラ島の竜宮神に渡って拝み、神人は当山マシ（ヌルオバァと呼ばれていた）、宮城マス（根神）、恩納ナビ（若ノロ）、松村義雄（若い頃）、公民館の区長と書記であったと語る。現在、大岩は道路際にあって家屋に接しており大型機械で大部分が削られ、ヒラ島はコンクリートの堤防が築かれて満潮でも往来ができ、竜宮神は往時は原野に石が並べられただけであったようだが今はコンクリートの祠が広い海洋をみて建っている。

ナガバカニクサは葉の葉序と形態から、高木性で葉が大きく、沖縄の神木の代表であるビロウ（クバ、コバ、蒲葵）と同じ“蓮型（束生・掌状型）”に分類された[20]。国頭村安田区と奥区のシヌグは、神祭に参加する男性みんなが神人となって、ナガバカニクサで作られたカーブイ（冠）を被り、それに熟した赤い果実がついたゴンズイの枝葉をさす[21、22、23]。浜比嘉島の聞き取りでは、神事にナガバカニクサのカーブイを被るのは女神人である。カーブイのガンシナー（鉢巻・冠）の輪の径は、浜区の柴引利哲氏は５㎝くらいであったといい、前仲門哲男氏はミカン大ほど（同５㎝ほど）で太くて立派な冠だったことを思い出すという。

蓮型は仏事のハスからくるもので、葉はハスの大きな葉・掌状脈葉、またハスの花冠の形に似る束生葉序も含めている[20]。ビロウはその大葉と掌状脈葉から蓮型に分類されたが、琉球地域でビロウが神木とされるのは、従来から、森林の樹群とくに御嶽林の中で他の木より高く抜きんでてハスのように大葉を広げ、幹は刻がついて梯子のようで、神が降臨し依り代にふさわしい姿を呈するからであろう、とする[13、24、25]。ビロウの葉は来訪神マユンガナシの蓑笠、女神人の扇、腰裳、敷物、聞得大君が斎場御嶽で即位式にふかれた仮屋の材料であったし、平安時代には扇、天皇や貴族専用の牛車、さらに天皇の即位式の前にみそぎ祓のためにこもる百子帳という仮屋や笠に使われ、また修験者が峰入りの際に蛇や災厄除けとして持つ簠簋扇（ほきせん）の原型は蒲葵扇だったのではないかという[26]。

吉野は[27]、神木としてのビロウは蛇信仰からきており、自然物の中で蛇に見立てられた最たるものは樹木で、その第一位は蒲葵であった、と考えられている。蛇信仰の来るところは蛇の形態で、蛇の頭部から尾に及ぶ全ての形が男根を連想させることにあり、蛇に見立てられる樹木の第一条件も男根

相似ということになると説く。ビロウはヤシ科の一般形態にみられるように、幹は分岐せず単幹で直立し、葉柄の落ちた跡が刻まれ木肌そのものが蛇に近似し、聖樹として信仰され、それが南方から稲作とともに列島に持ち込まれたのではないかと考究している。さらに神木は、日本では蒲葵の他に、藤、竹、梛（なぎ）、黄心樹（おがたま）、松、杉などがあり、蛇に見立てられたものには一連のツル植物があり、酸醤（ほうづき）のように実莢が蛇の頭部に似ているというものもある、としている。

吉野[27]はまた、木を蛇に見立てる信仰の根本は、弥生時代の思想ではないかと論じている。縄文時代は、巫女が情熱の赴くままに蛇そのものを頭上に巻きつけていたであろうが、弥生・古墳時代になると、蛇信仰の手段・方法は変化し、巫女の“着るもの”に蛇の形を紋様にしてタスキ、帯、裳などに写して身にまとっていたであろうという。類推すると、ビロウの神木と同じように、ツル植物を鉢巻にして神人が頭に被るのは蛇信仰の植物に見立てる一変化であり、奄美群島でナガバカニクサ（テリバカニクサ）の髄を水の中に入れておくと蛇になるという話はその表出で、シニグ祭祀に用いるカーブイの琉球古来の思想を包蔵しているのではないか、と思われる。

南方は[28]、蛇に発し竜の起原に及んで「竜は今日も多少実在する鱷等の虚張談に、蛇崇拝の余波や竜巻地陥り等諸天象地妖に対する恐怖や、過去世動物の化石の誤察等を積み重ねて発達した想像動物なり」と結んでいる。南方[28]によると、『本草綱目』にあるように竜と蛇は足の有無によって分け、足あるものを竜類すなわち蜥蜴群と足なきを蛇類とするが、竜の起源には蛇や蜥蜴（トカゲ）の他に、海蛇、蚯蚓（ミミズ）と蜈蚣（ムカデ）、蠑螈（イモリ）、鱷（ガク）、鮫（フカ）などがあり、崇拝の基には竜・竜王は池水中・海中・地中・山中を守護し、河の水が渇くことなく、山林を繁茂させ、豊作と縁があり、祖先再生に及ぶものもある。竜宮は地下や水中や海底にあり、陸地の水が海に流れ入るように宝も海に帰すとし、竜王の住むそれらの地には無量の財宝があり、竜蛇はそれら竜宮を守護するのであるとする。

竜蛇信仰について上田[29]は、竜は想像上の動物、蛇は実在の動物で、インドの民間では蛇と竜を信仰している中に、両方の信仰が混同し分かちがたくなったのではないかとされる。インドの竜・蛇の信仰は中国大陸に伝わり、中国から日本へもたらされて、荒神となり竜神となって普及するに至った。出雲の国ではさらに神在（有）祭と実在の海蛇の結びつきによって、しだいに竜蛇信仰へと発達したのではないかと思量している。

竜の形象は竜宮、すなわち琉球人のニライカナイに通じて、古来の蛇信仰が竜へと変遷し、ナガバカニクサのカーブイは蛇と竜の守護する、あるいは竜にこの世また村落の悠久の安寧を祈願する祭具となったのではないか、と古代へと夢が駆け巡る。ナガバカニクサのツル性の葉は中軸がくねり羽片が分岐して対になり、小羽片の掌状形と相描写して、身をおどらせ両足の指を広げて躍動する竜の姿を想像するに難くないであろう（図2）。しかも二又分岐する二次羽軸は約90度に

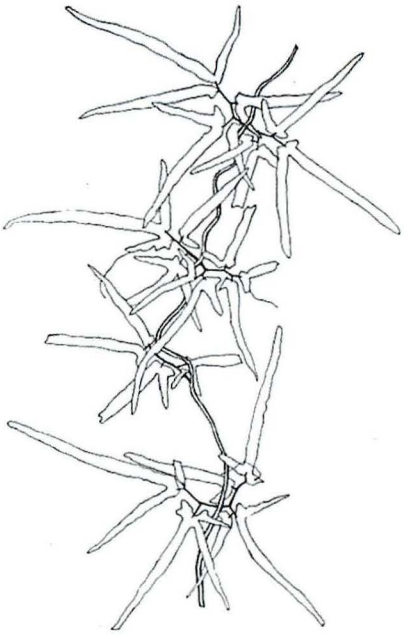

図2　ナガバカニクサの葉の軸と羽片
（中軸はツル状に二次羽軸は約90度に二又分岐する）

なるので、対生の様を見せて沖縄の独自性の祭具植物とする対生葉序型を連想させる[20]。国頭村安田区の豊年とムカデのシヌグ旗は、竜蛇信仰から－蛇－ムカデ－竜の変化にあり、与論島のミミジグサもその一連の方言名であるような気がして、遥か古人の感性を訊ねてみたい思いがする（図3）。ただ、沖縄方言ではミミズは広くミミジャーと称するが、与論方言では[19]ミミジャーはヒメフエダイ（魚）のことで、ミミズは

方言ミーミジと呼び、さらに方言ミーミジグサはクスノキ科スナズル（方言オーヌジグサ、ニーナシハジラともいう）をさし、ミミジグサについては再考の余地がありそうである。

図３　国頭村安田区のシヌグ祭祀の旗
豊年旗（右）とムカデ旗（左）

ナガバカニクサの背景

浜比嘉島の主要な二つの道路は、北側の大橋の出入口を挟んで浜区と比嘉区を結ぶ２車線の海岸道路と、比嘉区の部落の北側とその手前のノロ墓から島の高所を通って浜区の部落に至るセンターラインのない幅員5mほどの丘陵道路がある。現在は二つの道路とも幅員が広くアスファルトやコンクリートで舗装され、車が走る。比嘉区で17歳ころに父が亡くなり男神人を継いだという松村義雄氏は戦後１回だけ、かつての沿岸の崖下の曲がりくねった裸地の細い道をノロと一緒に浜区のシヌグ堂に向かったことがあると話す。さらにさかのぼれば、比嘉区の先人の神人たちは海岸の潮の満ち引きを気にしながら、浜区に向かい海浜の琉球石灰岩のノッチを腰を屈めたり白砂を踏んで通って行ったであろう。

戦前は、両区の神人はシヌグ堂に集って合同でシヌグ祭祀を行っていたと浜区民は語るが、現在比嘉区民でそのことを知っているのはとても少ないようである。両区民の伝聞と神人の話の詳細については確証に至らないが、両部落の神人や区民の話を合わせると、かつてシヌグ祭祀は両区の神人が合同で浜区のシヌグ堂を拝していたのではないかと思われる。比嘉区民がシヌグ堂での祭祀の状況をよく知らないのは、両部落の生立ちや歴史の経緯、琉球石灰岩の地勢や距離的隔離などで年間行事や習俗に関する互いの見聞・通知が極端に少なかったことが推察されよう。

比嘉小学校[6]が調査した年中行事コース、民話伝説コースの報告を概説すると、シヌグは旧歴６月28日と８月28日の年２回行われるが、祭事の内容は両月とも同じである。比嘉区の神人たちは、６月は西、８月は東の方から二才頭２人とヂーブのじいさんなどを連れ添って浜区に行った。神人たちの衣装はニーガミとワカヌールは白でタオルを被っていた。道の途中のアジマー（四つ角）では「ユウーベ」と３回唱えた。ソージアジマーで一休みし、二才頭たちは神人たちと分かれて、ウーアブガマに石を３つ投げ入れた。神人たちはクボーから浜区の方に出て広場（スガリ）で待ち合わせ、浜区のハルマーイ（畑を回る）して世果報を祈願してきた神人と合流する。二才たちが捕まえた鼠を、マカヤー（和名チガヤ）をヒジャイノーイ（左綯い）した縄でくるくる縛り、長さ50㎝くらいの縄でぶら下げ、それを浜の潮の満ち干するところ、３月３日の石に鼠を供えて拝み、次に浜の渡し場の砂が積まれているところに供え「今日はシヌグの日で、シヌグをしにきたのであるが、あたな方が生まれ育ったところはギノギ（キツキともある）島ですから、どうぞ向こうの島でくらしなさい」とみんなで拝んでその鼠たちを海に渡した。それから神人たちは浜区のシヌグ堂に行き、ごちそうを供えその後神人たちが分けあって感謝していただいた（図４）。

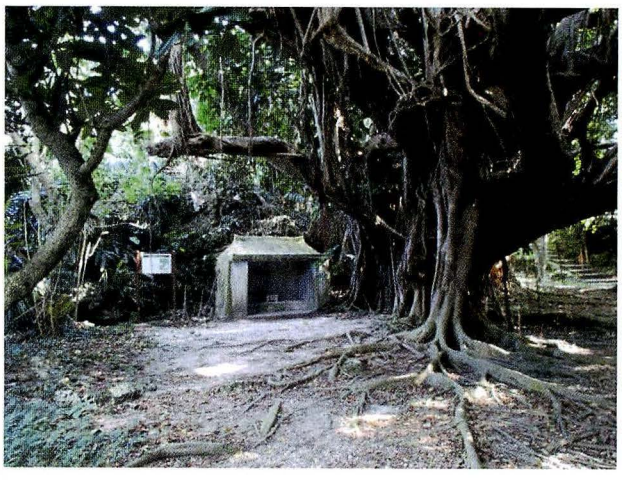

図４　シヌグ堂（浜区）
祠の前に茂るガジュマルの気根の叢生

シヌグ堂から引き上げるのは夕方の満潮のころである。沖に散在する岩群をエージビシといい、夕方には干し上がっていたその辺りの潮が満ち、追手が海を渡ってこないと見定めたからであろうという。シヌグ堂の行事が終わると、比嘉区の関係者は分かれて比嘉区の諸拝所を巡拝した。拝所の一つの浜崎では藪地島に向かって弓を射る所作をすることになっていたという[30]。

かつては朝も昼も食事は浜区のシヌグ堂で両区一緒に行ったが、戦後は比嘉区ではハマガー（ウブガー）でシヌグ祭事をやるようになった。今回の聞き取りでは、浜区は男神人（柴引利哲）・女神人（安谷屋カズミ）と公民館職員（自治会長：奥村靖彦、書記：土井メリ子）が午前11時頃、シヌグ堂へ行ってお重と酒を供え、神人が部落の安泰を祈願し、お重で食事を作るしぐさをしてそれをいただき、２時間くらいして帰ってくる。比嘉区は男神人（松村義男・時には中城村に住むヌンドゥンチ當山家出のノロ赤嶺芳枝が加わるという）と公民館職員（自治会長：新門　剛、書記：波田間あや子）が午後２時頃、ハマガーの近くへ行って粥と魚（缶詰もある）を供え、線香15本（平２本＋3筋）を立て、神人が区民の健康を祈願して粥と魚をいただき、30分くらいで帰ってくるが、洞に石を投げ入れることもなく、他に特別な所作もないという。2016年9月28日、浜区のシヌグの日（旧暦8月28日）に調査のためシヌグ堂への参加・参拝を申し出たが、シヌグ祭祀の本来の行事にそぐわないので遠慮するようにと認められなかった。

シヌグ祭祀の始まりはおよそ２つの意味があるようである[6]。一つは戦で中山に敗けた南山の武士平良忠臣とその仲間が、浜比嘉島に祖先の遺骨とともに逃れてきたので、村人は彼らの身を敵から護るためにシヌグの森や洞にかくまった。二つは村人を病気や災いとなる悪魔から護り豊かな食と平和を祈ることにある。それがシヌジャルシヌグ、凌ぐ、神遊（シノグ）、シヌグにつながった、と考えられている。シヌグの日は、浜区では朝早くから女性たちが「シヌグエンチャー、シヌグエンチャー、ハーマンカイウリリ」と竹で何度も自分の家の茅壁を叩き、男性はそれを合図に浜に作った小屋へ向かっていった。エンチャーは鼠のことで、鼠も人と一緒に力を合わせて敵を追いかえそう、という意味であるとされている。

浜区の柴引正道氏は15歳くらいまで「シヌグエンチャー、ハマンカイウリラリヨー」と大声を出し、やはり竹で何度も自分の家の茅壁を叩いたそうである。朝から夕方まで、男性は島に他所の人が入らないように警戒し、女性は昼食の他いろんなご馳走をつくって、男性と一緒に浜辺で過した。比嘉区の玉城弘氏の話では、浜辺に小屋を作って陰で休み、比嘉区では男性全員が浜へ行ったが、兼久では隣近所同志５軒くらいが別々に浜辺に集まったという。小屋は身近にある材木などを立て、船の帆を張って作ったらしい。

男性の浜での見張りは１日であるが、他所の人を入れないのは３日間続き、その間他所から来る人は親兄弟、親しい人であっても、また天候が不順であっても一切島に入れずに海浜に留め置かれそこで食事をとった[6]。今回の比嘉区の聞き取りでは、夕方４時頃には家に入れたといい、昼食が済んだら家に招いたともいう。

浜比嘉島のシヌグ祭祀にはいくつかの興味ある行事や課題がある。第一には神人がカーブイ（冠）にするナガバカニクサ、二つには祭事を司るのがカーブイを被る女神人、三つにはネズミ、四つには弓を射る所作、五つにはシヌグ堂の場所と同様に祭事のすべての動きが浜辺あるいは浜辺に近いところで行われることである。

第一のカーブイに用いるナガバカニクサは国頭村安田区と奥区などの山原地域、また方言名（カブリカズラ、ウンジャンカズラなど）から与論島・奄美群島と共通する。記録から、浜村は18世紀以後船乗りが目立ってくるが[7]、勝連・浜比嘉島は海を渡ってきた琉球開闢の神の定住した島とされ、古人より“おもろさうし（しよりゑとの節　十三巻九三九）”に『勝連（かつれん）が　船遣（ふなや）れ　船遣（ふなや）れど　御貢（みかまえ）　喜界（きゝや）　大みや　直地（ひちやぢ）成（な）ちへ　みおやせ　又　ましふりが　船遣（ふなや）れ』（与勝人の航海だ　航海こそ御貢物である　喜界島、奄美大島を　陸続きにして差し上げよ　マシフリ（人名）の航海だ）[31]と詠われるように、航海を日常として山原その他北南の地と交易していたのではないだろうか、航海は物流だけでなく、人の移住や文化にも及んだであろう、カーブイのナガバカニクサの共通性はその証と思われる。浜村の地名に及んで思うことであるが、かつての「はま村」とは浜比嘉島の全体の呼称なのか、現在の浜区をいい比嘉区は後に発展して分村したのか、あるいは「ばま島」全体が発展して両村・両区に分かれていったのか、歴史をなおひも解く必要があろう。

さらに、同じように神の島と称される近隣の久高島にはシヌグ祭祀がなく、イザイホーなど神祭のときの女神人のカー

ブイに用いられるのはトウツルモドキである。両方のツル植物の葉・葉序からナガバカニクサは蓮型・掌状型でトウツルモドキは剣型であり[20]、これら植物種を通して小野[32]が分類した琉球祭祀の照葉樹山地型と海洋性平地型を再考したいものである。

一般にシヌグは照葉樹山地型になり男性年齢階梯集団による森の祭事で、ウンジャミは海洋性平地型の女性神役組織による海の祭事である[32]。男性年齢階梯集団による山地型の山原地域と異なり、浜比嘉島のシヌグは、女神人がナガバカニクサのカーブイを被って沿岸の御嶽・堂で祭事を行うが、女神人が祭主となるのは山原地域のウンジャミ、久高島のイザイホーなどと同じである。与論島のウンジャミは明治初年頃になくなったといわれるが、女性神役組織によるもので女神役は頭に蔓で作った冠を被り、神衣をつけ、ススダマの首飾りをかけ、手には鈴をいくつもつないだのを持ち、浜に集まってニレーの神を迎えたという[33]。与論島は、シヌグでは実をつけたヤマブドウをたすきのように身にまとうが、方言名からすると[16]、ヤマブドウはヤマブドー（テリハノブドウ）であるのに、ウンジャミに被る冠の蔓はウンジャンカズラ・ミミジグサと呼んでいるナガバカニクサ（テリハカニクサ）の可能性が高い。ウンジャミには神を伴って、ウンジャンガラガラと鈴をならしながら部落から城へ登ったというから[33]、ウンジャンカズラはウンジャミに使うカズラ（蔓）の意味と思われる。

若い男（二才）たちが、鼠をつかまえてチガヤで縛ってぶら下げ、祭りの最後に海に送る神事は、国頭村奥間・比地区のウンジャミ（図５）・安波のシヌグ（竹串にさした）－大宜味村謝名城のウンガミ－名護町のウンジャミ－伊平屋村我喜屋のシヌグ[34]、などとほぼ同じである。南方[35]は世界各地の鼠に関する民俗を記述し、インド以北では福神毘沙門と歓迎され、鼠群が敵兵の武器をことごとく噛み断って勝利した話がエジプトにもあり、ボンベイ辺の民人は鼠を鼠叔父と呼び、ドイツの俗信に死人の魂は鼠になるといい、大抵の国では白鼠を吉兆とし、コンゴ国には鼠を神林の王とし、世界には鼠の害を静めるために呪いを行ったり、神と祈った例もある、とされている。また鼠はよく物を盗むことから支那には鼠の穴を掘ってその貯えを盗み食った例も多く、東西洋とも鼠を医療に用いた事も多く、日本では鼠は大黒天神の厨家豊穣の神となり、根津とは鼠の謂れで、根津権現社は鼠害を静めるために鼠を祝い込めた社でという。「およそ鼠ほど嫌い悪まれる物は少ないが、段々説いた所を綜合すると、世界の広き、鼠を食って活き居る人も多く、迷信ながらもこれを神物として種々の伝説物語を生じた民もあり、鼠も全く無益な物ではないと判る」と結んでいる。

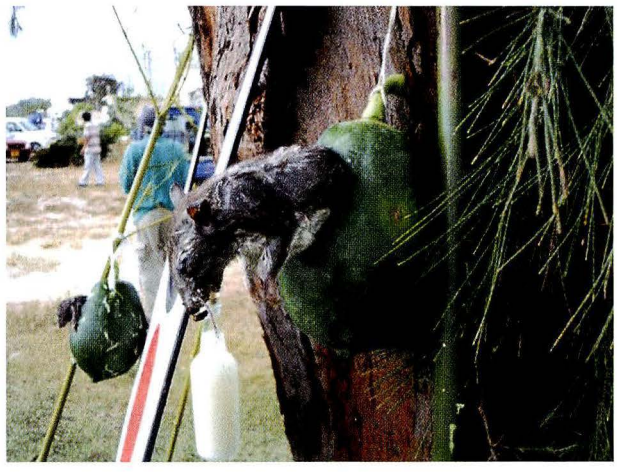

図５　国頭村奥間・比地区のウンジャミ
パパイアの実に入って吊るされたネズミ

沖縄は村によっては、豊作を荒らす鼠を駆除し、猪狩りあるいは豊漁の呪術祭祀が行われるという[36]。柳田[37]によると、鼠は日本各地に農作害の話があり、畠の物を喰い、籾・苗・穂先まで、麦・粟・唐芋・落花生・砂糖黍も食う、草木の根を掘り起し、貯えている五穀を損ない、また鮑を食って繁殖するが、鼠は増えたり減ったりで、海を渡り、海からやってくる、沿岸に住む昔の人たちは、島の鼠がニライカナイから渡ってきたものと考えていたらしい、とされている。鼠は繁殖が旺盛で、終にものの欠乏に駆り立てられて海を渡るすがたは、たとえ常世の海波に生命を失うものがいたとしても、島に着いたものがさまざまな食べ物を獲得して鼠算で種族を存続する、その所以から村の永遠の道筋へと血縁・部族の維持存続を祈る神事に結びついたことが考えられる。浜区の浜門勇氏は、島は人数が少ないので鼠の助けをえてシヌジャルシヌグを行ったと話すが、鼠を海に渡すのは、もとの海の浄土へ鼠を送り届け、そしてシヌグエンチャーの遠来の鼠・始祖の力に祈願しこの世の災厄を追い払うように在野の鼠に助力を求めたのだろう。

四つ目の弓射があるが、弓矢の起源は中石器時代に遡ると

いい[38]、弓神事には射礼に求めようとする歴史学的立場と、古代の儀礼的狩猟に求めようとする民俗学的立場があり、その起源を決めつけるのは非常に困難であるとしている。弓矢は戦の武器だけでなく、狩猟時代の獣を射る道具また呪術的な意味の祭事に用いられ、弓神事の事例としては子どもの誕生祝、魔祓い、厄除け、五穀豊穣、村の安寧、成人儀礼、狩猟始め、などがあるとされる。弓神事の機能や目的から、弓は太陽と月を射る「宇宙の更新」があり、村落における農作物の成長と宇宙の進行とは密接に関係し、邪悪なものによって衰弱した時間や空間を、弓を射て活力あるものに変換して更新することができるとする思想にあると考えられている。浜区の前仲門哲男氏は、祖母マシさんが神人（ノロ）で幼いころ島のいろんな神事をみていて、どこかで子が生まれるとマシさんが小さな弓矢でその子の体を射る所作をしたと語る。

弓の儀礼は、山原地域では猪の模造物を射る国頭村与那のウンジャミ・奥のウンダミ・安波のシヌグ・奥間・比地のウンジャミ・辺戸のウンジャミ（下に向ける、戸を叩く）・辺土名のウンジャミ - 大宜味村謝名城のウンガミ（上下する）・根路銘のウンガミ - 塩屋・田港・屋古のウンガミ－羽地村のウンギャミ－伊平屋村田名のウンジャミ・シヌグ[34]、本部町瀬底のウフユミシヌグイ（ウフユミ、ハンブトゥーキ）・備瀬のシヌグ（サグンジャミ）[39]がある。与論島では旧歴7月17日の本祭の最後に、パンタ（琉球石灰岩の断崖の上）で弓矢の擬戦を行い、田で沖縄の北側に向けて弓矢を放つという[40]。瀬底のウフユミとハンブトゥーキは、男神人や女神人が何度か弓矢で地面を突いたり矢を放ち投げたりで、豊漁・豊作の感謝と予祝、祓い、子孫繁昌を願い、備瀬のサグンジャミは弓矢をつがえ、一家の悪風や邪霊を祓い、健康安全と繁栄、幸福を招来する[39]。浜比嘉島のシヌグの弓射は、海洋から侵入する外敵や病害を祓いまた島の豊穣と安寧を願う宇宙との対話があったのだろうか。

総括してみると、浜比嘉島のシヌグは本来のシヌグとウンジャミの合祭の感じがあり、人と自然と神を取り巻く宇宙観にあると考えられる。国頭村安田区や奥区など山原地域のシヌグは森の祭祀でカーブイに使われるナガバカニクサは、あるいはまた与論島・奄美群島も含めて相互に航海による文化の交流の影響が浜比嘉島シヌグに及んでいることが推察される。浜区の沿岸部にあるシヌグ堂の情景は、背後の石灰岩地の亜熱帯照葉樹林と祠を包み込むほどの気根が密生するガジュマルの大木と混生して、洋上の小島にあって森の相観を醸し出す。その情景から浜比嘉島のシヌグは森の祭祀の感があるが、ナガバカニクサのカーブイを被り祭事を司るのが女神人で、男神人や島の男性が参加するものの、山原地域のシヌグのように男神人が祭主となり身に草木の枝葉をまとって山から神を迎える姿はない。

さらにネズミの儀礼はウンジャミ祭事に用いられることが多く、ネズミは海を往来する来訪神となり、現実では農作物などに害をもたらすが、海から来る災厄を祓う助力にもなる。そして儀礼の最後にネズミを埋めたり処理するのは、国頭村奥間・比地区のウンジャミにみられるように海の神人の役割である。また弓射あるいは弓をたずさえる儀礼はほぼすべての村落でウンジャミ祭事にあり、女神人がその役目を担っている。浜比嘉島のシヌグは祭事を司る女神人をはじめネズミや弓の儀礼からウンジャミ祭事の要素がかなり入っている。

琉球のシヌグ祭祀を探究するには、浜比嘉島さらに与論島のシヌグ（シニグ）とウンジャミはかなり示唆的である。与論島のシヌグは、座元（祭主）はティダラキウガン（寺崎御願）で赤い神衣、赤いハチマキに、実の多くなったヤマブドウ（テリハノブドウであろう[16]）をたすきのように身にまとい、供人は白い神衣、デーク（ダンチク）の束を持つ、ウンジャミは現在行われていないが、かつて女神役は頭に蔓（ナガバカニクサであろう）を巻いたカーブイ（冠）を被ったという。シヌグ神は、テリハノブドウを身にまとった祭主（男）一人で、出現の場所は海辺の御願所、神はパル（原野、農地）を通って生活界であるサトと準他界であるパンタに迎えられるが、島には他界としての山がないので、海辺の御願所が山的なものに相当するものとみられている[33]。

小野[33]は、先に男性の年齢階梯祭祀のシヌグがあり、女神役組織のウンジャミは後にそれから分化したと考えているが、原型は男女が共同でまつる祭祀があったとする考え方もある[40]。浜比嘉島のシヌグは、ナガバカニクサを冠した女神人が祭主となるが、堂（御嶽）や海浜で男神人も男性たちも共に祭事を行い、血族・部族の安寧と永続を祈る尊厳ある神事で、シヌグ・ウンジャミの土着信仰の源泉を遠く偲ぶ気がする。浜比嘉シヌグは「海の行事」であり[41]、海から流れ着いた男を護り（聞き取り）、「しぬぐあれ」[30]といい「波風アラチタボリ」[4]と海が荒れて追手が侵入できないように御願するように、海洋の「ユー」（豊穣・繁栄・果報[42]）の来訪神を堂・

島に迎えつつ、海洋の災厄から島を防御する複合の祭祀のような思いが響いてくる。シヌグ堂の森の守護を抱き、島の男性は一斉に海辺に陣取り、ネズミや弓矢を儀礼にして、ニライカナイの桃源郷の思いを民俗に表出しているように思われる。そのかたちが、浜区の海辺の竜宮神で、比嘉区のヒラ島の竜宮神であろう（図６）。その源底は、竜のすがたを内示するカーブイのナガバカニクサの葉の中軸や葉序や羽片のかたちにある、と思いをたくましくする。

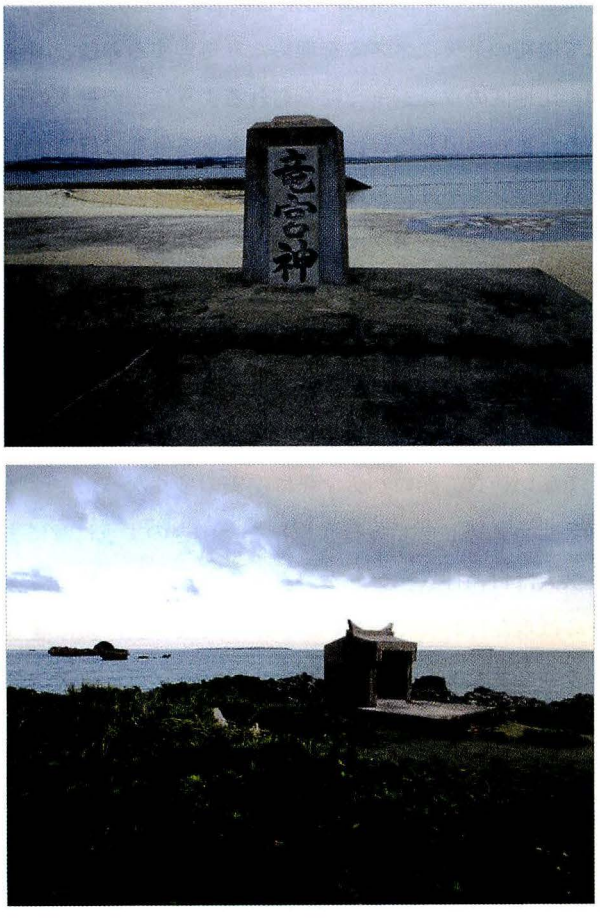

図６　竜宮神、浜区（上）・比嘉区（下）

旧比嘉小学校跡地に設置した特定非営利活動法人てぃだ与勝の障がい者就労継続支援Ａ型事業所「竜宮の島センター」に勤務してから、島の人たちには公私ともにたくさんの恩恵をいただいている。本調査にも、多くの方が面倒くさい聞き取りに辛抱強くご協力下さり、浜区の柴引利哲氏、比嘉区兼久の玉城　弘氏は何度訪れても快く応じていただいた。兼久の郷土史研究家・玉那覇成勇氏には畑仕事や勉学の合間の貴重な時間に、有意義な意見を交わしていただいた。浜区と比嘉区の公民館の自治会職員、ご協力いただいた方々に併せて深甚の感謝を申し上げる。

浜比嘉島のシヌグは、今次大戦前また戦後間もない頃と比べて現在はかなり簡素化されていて、聞き取りで調査協力者のおぼろな記憶を呼び起こし、文献と照合しながらかつての状況を掘り起こすように努めた。本小論が調査協力者の本意とかけ離れたものがあるとすれば、著者の責任に負うものである。

引用文献

1）平安座自治会「平安座自治会館新築記念　故きを温ねて」1985年、与那城村平安座自治会（現うるま市）、沖縄

2）沖縄県土木建築部中部土木事務所「浜比嘉大橋建設誌」1997年、沖縄

3）當真嗣一「浜比嘉島小史」1990年、県立博物館総合調査報告書Ⅶ―浜比嘉島（はまひがじま）―、沖縄県立博物館

4）琉球大学民俗研究クラブ「勝連村浜比嘉島調査報告」1988年（復刻版）（1962年発行）、沖縄民俗・全５冊（民俗、第五号）、第一書房、東京

5）うるま市役所企画部企画課「うるま市統計書」2011年、沖縄

6）比嘉小学校「浜比嘉島の年中行事と伝説」「神の島浜比嘉島のはなし」1986年、勝連町立比嘉小学校、沖縄

7）高良倉吉「浜比嘉島シマ断簡」2000年、アジア農村研究会編『2000年３月アジア農村研究会第８回調査実習レポート集・沖縄県勝連町浜比嘉島調査報告書』、アジア農村研究会、東京大学文学部東洋史学科桜井研究室

8）沖縄国際大学「浜比嘉島比嘉・兼久村落民俗調査報告書」2007年、みんぞく第19号、沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科アジア文化ゼミ、沖縄

9）岩槻邦雄・編「日本の野生植物シダ」2000年、平凡社、東京

10）田川基二「原色日本羊歯植物図鑑」1967年、保育社、大阪

11）牧野富太郎「新日本植物図鑑」1968年、北隆館、東京

12）初島住彦「琉球植物誌（追加・訂正版）」1975年、沖縄生物教育研究会、沖縄

13）長沢　武「野外植物民俗事苑」2012年、ほおずき書籍、長野

14）呉憶萍「臺灣民俗植物」2001年、富育國際股份有限公司、

台湾
15) 天野鉄夫「琉球列島植物方言集」1979年、新星図書出版、沖縄
16) 大野隼夫「奄美群島植物方言集」1995年、財団法人奄美文化財団、鹿児島
17) 玉置和夫「沖縄の植物と民俗―玉置和夫遺稿集―」1979年、玉置和夫遺稿集刊行会、東京大学農学部森林植物学教室内
18) 下地盛路「宮古方言集第一集」(宮古島市史試料) 2014年、宮古島市教育委員会、沖縄
19) 菊　千代・高橋俊三「与論方言辞典」2005年、武蔵野書院、東京
20) 新里孝和「沖縄シヌグ神祭の植物観」2013年、名護博物館紀要「あじまぁ」、17号、沖縄
21) 新里孝和「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅰ)」2014年 a、琉球大学農学部学術報告、第61号、沖縄
22) 新里孝和「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅱ)」2014年 b、琉球大学農学部学術報告、第61号、沖縄
23) 新里孝和「沖縄・国頭村奥シヌグの祭祀植物イヌガシ」2014年 c、琉球大学農学部学術報告、第61号、沖縄
24) 宮城真治「山原－その村と家と人と」(宮城真治資料1、「第一部・第一章、御嶽」) 1987年、名護市役所、沖縄
25) 黒島寛松「沖縄の自然　植物」(カラー百科シリーズ①) 1974年、新星図書、沖縄
26) 初島住彦・飯島吉晴「ビロウ属」(堀田　満：代表「世界有用植物事典」) 1991年、平凡社、東京
27) 吉野裕子「蛇　日本の蛇信仰」(「ものと人間の文化史」32)、1988年 (第6刷)、法政大学出版会、東京
28) 南方熊楠「十二支考 (上)」(「田原藤太竜宮入りの話」「蛇に関する民俗と伝説」) 2009年 (第21刷)、岩波書店、東京
29) 上田常一「山陰特有の民俗　竜蛇さんのすべて」(谷川健一：編「蛇 (ハブ) の民俗」日本民俗文化資料集成第二十巻) 1998年、三一書房、東京
30) 勝連町立比嘉小学校「浜比嘉島の話　郷土教材資料として」1984年、第16回沖縄へき地教育研究中頭大会、沖縄
31) 外間守善「おもろさうし　古典を読む22」1986年 (第3刷)、岩波書店、東京
32) 小野重郎「生態史としての南島文化」1988年、沖縄文化研究14、法政大学沖縄文化研究所紀要14、東京
33) 小野重朗「奄美民俗文化の研究」(Ⅳシヌグ・ウンジャミ－与論島のシヌグとウンジャミ) 1982年、法政大学出版会、東京
34) 名護市史編さん室「やんばるの祭と神歌」(名護市史叢書・15) 1997年、名護市教育委員会、沖縄
35) 南方熊楠「十二支考 (下)」(「鼠に関する民俗と信念」) 2008年 (第20刷)、岩波書店、東京
36) 仲松弥秀「古層の村・沖縄民俗文化論」1978年 (第2刷)、沖縄タイムス社、沖縄
37) 柳田国男「海上の道」(鼠の浄土) 1982年 (第5刷)、岩波書店、東京
38) 波部綾乃「弓神事の民俗的機能－名張市・天理市の宮座行事を中心に－」2013年、古事：天理大学考古学・民俗学研究室紀要、17、天理大学考古学研究室、奈良
39) 仲田善明「本部のシヌグ」2003年、沖縄学研究所、東京
40) 高橋誠一・竹　盛窪「与論島－琉球の原風景が残る島－」2005年、ナカニシア出版、京都
41)) 沖縄国際大学「浜比嘉島浜集落民俗調査報告書」2008年、みんぞく第20号、沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科アジア文化ゼミ、沖縄
42) 笠原政治「ユー」(渡邊欣雄・岡部宣勝・佐藤壮広・塩月享子・宮下克也「沖縄民俗辞典」) 2008年、吉川弘文堂、東京